

## 第二節

### 猶多怨嫉

科文 1 1\*1

惣じて末法弘經の時には三類の怨嫉盛んなるべきを示す

#### 本文

夫れ以れば末法流布の時、生を此土に受けて此經を信ぜん人は、如来の在世より猶多怨嫉の難、甚だしかるべしと見えて候なり。

#### 現代語訳

よくよく(今まで私が体験してきた法難、刀で切られそうになったり草庵を焼き討ちされたり、あるいは伊豆に流されたり特にこのたびの龍口の斬首、佐渡遠島などのことと經文に書かれていることとをつき合わせて検討し)考えてみますと、(仏が亡くなられて二千年後から始まる)末法(という時代は上行所伝の御題目がいよいよ弘められ、あまねく世の中に)流布される時なのです。しかし、この時代にこの国土(すなわち、娑婆世界といわれ苦しみ絶えない所に)生を受けて、この經(すなわち法華經の御題目)を(心から)信ずる、(また、体で実践する)人には、如来のご在世の時代から(法難が起こって三類の強敵が襲いかかってきたのですが、この末法時代にあっては、なお一層その法難のありようが激しく)「猶多怨嫉」の難がはなはだしいと(法華經の經文に予言されているとおりだと)思われるのです。

#### 語句

##### 猶多怨嫉の難

法華經の法師品第十に「此の經は如来の現在すら猶怨嫉多し。況や滅度の後をや」(法華經開結三一三頁)と説かれている所が典拠です。

怨嫉についてはすでに説明した通り、あだみねたむという意味で、三類の強敵が法華經の行者を襲うということです。ただ、ここで、お經文を引かれて「猶多怨嫉の難」とわざわざ言われているのは、如来すなわち仏のご在世(ご存命という意味、如来の現在という言い方をするときもある)の頃は、もっと今より穏やかな良い時代であったのに法難があった、ましてや末法という悪い世の中になればなおさらであるというので、「猶多 なお……多い」と怨嫉という言葉の上に冠されているのです。

## § 第三節

### 末法は師弟ともに悪人

科文 1 2 1 1

在世を以て滅後末法を況し、師弟俱に凡夫悪人なることを示す

#### 本文

其故は在世は能化の主は佛なり、弟子又大菩薩阿羅漢なり。人天四衆八部人非人等なりといへども、調機調養して法華經を聞かしめ給ひし、猶怨嫉多し、何に況や末法今の時は

教機時刻到来すといへども其師を尋ねれば凡師なり。弟子又鬪諍堅固白法隱没三毒強盛の悪人等なり。故に善師をば遠離し、悪師には親近す。

#### 現代語訳

なぜ(いま末法の方が怨嫉が多く起こるの)か、その理由は、ご在世の場合は、教化育成する側はみ仏であり、(教導を受ける)御弟子もまた、大菩薩とか、阿羅漢(という位の高いすぐれた人々)です。(中には、そういう上の方の世界の人々だけでなく、仏様の御法門を聴聞しているのは)人間として生まれ僧侶、僧尼となっていたり在家の男女の信者で修行している人もあり、または特別な能力がある天人であったり、あるいは八部といい八種の超自然的な存在者(人非人)までも含まれていますが、みな、長い年月をかけて(釈尊が)教えを施し修行させ能力が高まるよう努められてきた上で、法華経を聞かせられたのです。それでもなお、怨嫉が多く起こりました。ましてや、末法、今の時は、「教」は法華経、教えを受ける人の宗教的素質である「機」は仏の種が植わっていない人々、そして時刻は末法、国は上行菩薩が出現して法華経の御題目が弘まるべき日本と)教機時刻(国)、それぞれ、ふさわしいものが到来し揃ったとはいえ、その師を尋ねれば凡師であります。弟子はまた、鬪諍堅固といわれ鬪争が盛んで、清く正しい白法が隠れてしまう末法に生まれ合わせ、また、貪瞋痴の三毒が強く盛んな悪人であります。だから、善き師を遠ざけ、悪師には親しみ近づくのです。

#### 解説

門祖聖人のご科文の意味は仏様のおられた在世の時代と、仏滅後二千年を経たいま、末法の時代を対比したところであるというわけです。釈尊ご在世の時代は師弟ともに今の時代よりも徳が高かったのに、今、末法の時代は教えを説く師(お祖師様)は凡師であり、教えを聞く人々は悪人です。仏様のご在世の時代にも法難が起こったのに、ましてや今、末法に法難が起こらないはずはないと、法難が起こる理由を述べられる所だという意味です。

お互い当宗のご信者はお祖師様については、仏様にも等しく考えていますが、お祖師様ご自身は常に謙虚に、「私は仏に比べれば一介の凡人」と考えられており、だからこそ仏説を何より尊重して経典をあまねく研究され、納得できる結論を求められたのです。その実は、お祖師様は法華経に説かれている上行菩薩の生まれ変わりで、ご自身もそのことには佐渡島ご流罪以前は薄々、そうではないかともご内心では思っておられたようですが、佐渡ご流罪によって確信されるに至りました。法華経の行者が法難に値うことは経文に予言されているのですが、伊豆、佐渡と二度もご流罪になったことが法華経のお経文に「数々見擯出」(しばしば擯出せらると読む。「擯出」とは追放、遠島などの意味で、「しばしば」とは何回もということだから、ただ一度だけの伊豆ご法難に値われただけでは「しばしば」とはならない。このくらいお祖師様は仏説を尊重し、釈尊を仰ぎ見られたのである。)と出ていることとまったく一致することになったのです。あまりにもお祖師様ご自身の歩み方、生き方が法華経に出てくる上行菩薩のあり方と符合することにご自身が驚かれたのです。

しかし、当時の人々にとっては日蓮聖人は上行菩薩の後身どころか、千葉県の子田舎出身で、比叡山で多少、勉強して帰ってきた天台宗の一介の僧侶というに過ぎません。その上、末法という時代に生まれ合わせるお互いはお祖師様当時の人々も、今の私たちも皆、三毒強盛の悪人で正しいものが正しいとは分からず、法華經の教えを聴聞しても反発する者ばかりですから法華經の御題目のご信心を弘める善師からは遠ざかり、邪法を弘める悪師には近づくのです。

### 悪人について

さて、ここで三毒強盛の悪人、また、悪師というようにお祖師様は言われていますが、どういう基準で悪人とか悪師とされているのか疑問に思われる方はないでしょうか。

善悪は、仏教の読み方では「ぜんなく」「ぜんまく」と読みます。ついでですが、看經を「かんきょう」と読まずに「かんきん」と読んだりするのはなぜか、仏教の読み方は一般の漢字の読み方とどうして違うのかと申しますと、それは仏教が日本に入ってきた時、中国の王朝「呉」の時代の読み方、すなわち呉音が中心となっていたからです。

善悪についての考え方では、仏教にも二通りの説があります。

私たちが分かりやすいのは一般的な素朴な考え方で善とは何かとか、悪の本質はなどという問いを投げかけずに、常識的に善いことは善い、悪いことは悪いという考え方です。これについては有名な七仏通戒偈というものがあります。

諸悪莫作 衆善奉行

自淨其意 是諸仏教

もろもろの悪はなすなかれ

もろもろの善は奉行せよ

みずからその意を淨くする

これ諸佛の教なり

これは、釈尊の前に過去の仏が出現し、あわせて七仏であるがその七仏の教えは共通しており、善いこと、悪いことを良心に従って判断して、悪をなさず、善を実行せよというものであるということです。難しい教理を云々していても、自己の良心に従わず悪事をなす偽善僧や偽仏教徒は昔からいますし、今もいて多くの人を惑わせているのです。以前、倫理学の本を盗んだ某有名大学の学生の記事を見たことがあります。何をか言わんやですが、同じような過ちを私たちご信者も犯す危険性があるのです。平気で嘘をついたり、人を欺いたり、陥れたりなどしたら仏教徒としてやはり、恥ずべきことになります。十五世御講有、田中日晨上人が宗風を強調されたのはそういうことからです。いくら信心が強いといっても、あまりにも自己本位の振る舞いをしている人、悪事を悪事と知って行う人の信心は本当のご信心ではありません。

さて、善悪についてのもう一つの考え方とは、いま申し上げた常識的な善悪、世間的な善悪の他に宗教上の善悪を認めるあり方です。あるいはもっと、積極的に宗教上の善悪を世間の善悪の基準を越えるものとする見方です。

原始経典でも仏とは「善と悪とを捨て、目ざめた者」〔法句経(三九)〕、「善と悪とを捨て、…生死を超越した者」〔スッタニパータ(五二〇)〕と説いています。

これはどういうことかという、人に指さされない生活をしてまじめに朝から晩まで働き、幸せな家庭を営み、また、人のためにも多少善いことをしても、なおかつ私たちには満たされないところがあるということです。それは、小さな自分の世界に満足しているだけで仏の悟りの世界、永遠の安らかな世界からは程遠いかもしれないからです。世の中の真相、真理を見極めたいという気持ちです。

特に思索を好んだインドの人たちは、私たちの世界が基本的に欲望や煩悩をもとにしてできあがっていることに気づき、そうである以上、今の生涯で人並みの幸せを得て、多少の善を行ったという満足感を得たにしても、それはなにかホンモノではないし、また、長続きしないと考えたのです。また、インド一般の古来の考え方である輪廻説 この一生が終わっても次の生涯があり、さらに次の生がある、そのわだちからは永遠に抜け出せないという を信じていますから、いま楽をしても、この世では幸せでも次の世は保証されていないのです。もしかしたら、次の世では大変な苦しみを味わわなくてはならないかもしれません。永遠に欲望や煩悩を基にした生活とまではいかなくとも、現在の小さな自分中心の暮らしをあくせくしている限り、ハツカネズミがくるくる廻る輪の中からいつまでも抜け出せないように、何かに閉じこめられているという感覚を持ったのです。これは、ある意味で人間の本性的欲求といってもよいでしょう。それに大多数の古代のインドの普通の人は、この世を苦しみがあふれた世界だと感じていました。

そこで、この輪廻のわだちから抜け出すために多くの人々が宗教的实践、修行を志したのです。我が国の国民性からは想像しにくいことですが、インドでは昔、人生を四つに分け、最後を林住期として家庭を出て静かな林の中で瞑想に耽るのが人生を締めくくるにふさわしいと考え、実際にそうしていた人が大勢あったのです。輪廻から抜け出すことを解脱といいます。解脱という言葉はなにも仏教の専売特許ではなく、インドの宗教共通の言葉です。ただ、釈尊は本当の解脱の道を実践され教えられたということです。\*2

要するに、宗教上の善とは修行によって輪廻から解脱して、悟りの境地(涅槃)にはいることで、これを求めることこそ真実の善、絶対の善であるという考えに至ったのです。

もっとも実際は善の実践について、初期の仏教でもそれほど複雑な難しいことをせよというのではなく、八正道といい八つの正しい道を歩めとか、十の悪を離れることを十善と称し、十善の行為を十善業道といい奨励しました。

十悪について開導日扇聖人は

十悪は 殺盗婬に 貪瞋痴

妄語と綺語と 悪口両舌

一三八三

と、お示しになっています。

つまり、十悪とは

### 身三(身業、体で作る悪 三)

- 1 殺生 生きているものを殺すこと
- 2 偷盗 他人のものを盗むこと
- 3 邪淫 不倫行為

### 口四(口業、口で作る悪 四)

- 1 妄語 嘘をつくこと
- 2 綺語 巧みに飾った偽りの言葉
- 3 悪口 悪口を言うこと
- 4 両舌 二枚舌を使うこと

### 意三(意業、心で作る悪 三)

- 1 貪欲 飽くなき欲望の追求
- 2 瞋恚 怒り
- 3 愚癡 因果の道理の無知

以上の十悪が立てられたのですが、口の悪が四つ立てられているのは人間の行為として、言葉を最も重要視したものです。最後の意三は、悪を突き詰めたときの根本の悪とされたもので、貪瞋癡の三毒と呼ばれています。

これらの十悪を犯さないことがそのまま、十善であるとされたわけです。

### 本当の悪とは

さて仏教では悪の中の悪として、やや特殊な例ですが五逆ということが強調されるようになりました。この五逆は多分に世間的な人倫に背く悪という意味合いが含まれているものです。

五逆とは、1)殺父 父を殺すこと、2)殺母 母を殺すこと3)殺阿羅漢 聖者を殺すこと、4)出仏身血 仏を傷つけること、5)破和合僧 教団を破壊することで、この五つが最も重い罪悪とされました。

お祖師様は

「唯日蓮の諸人にかはる所は阿弥陀佛の本願には『唯五逆と誹謗正法とを除く』とちかひ、法華経には『若人不信毀謗此経則断一切世間佛種乃至其人命終入阿鼻獄』と説たり。此善導、法然謗法の者なれば、たのむところの阿弥陀佛にすてられをはんぬ。

と仰せのように、「唯だ五逆と誹謗正法とのみを除く」と、浄土教の經典の無量寿経の中で、どうしても救われない重罪のものは、上記の五逆罪を犯した人と誹謗正法の者であるという経文を引かれ、また法華経の「もし人、信ぜずしてこの経を毀謗せば則ち一切世間の佛種を断ぜん……その人、命終りて阿鼻獄に入らん」とある経文を引用されて真理、真実の仏説である法華経を毀謗する、そしれば大変に重い罪であると仰せです。

誹謗正法という語は涅槃経にも出ていることから分かるように、仏教一般で重い罪とされたわけです。誹謗正法は省略されて謗法と呼ばれ、こちらは世間上の罪悪というよりも宗教的な罪悪でより重いものとされたのです。お祖師様は両者を対比されて

「法華經に云く『若し人信ぜずして此經を毀謗せば、即ち一切世間の佛種を断ぜん。(乃至)其の人命終して阿鼻獄に入らん』已上。夫れ經文顕然たり。私の詞なん何ぞ加へん。凡そ法華經の如くんば大乘經典を謗する者は無量の五逆に勝れたり。故に阿鼻大城に墮ちて永く出づる期無けん。涅槃經の如くんば、設ひ五逆の供をば許すとも謗法の施を許さじ。蟻子を殺せる者は必ず三惡道に落つ。謗法を禁ずる者は定んで不退の位に登る。(立正安国論 昭定二二三頁) と、仰せになりました。

なぜ、父母や聖者を殺すより仏を傷つけるより、謗法という罪惡の方が重罪であるのかといえは、一切の人々の成仏を妨害し眞實の教えが弘まるのを妨げるからです。

以上のような理由で、たとえ福祉や慈善事業を行って聖人とあがめられるような宗教者でも、眞實の仏説である法華經を誹謗し、仏の仮の教え、方便として説かれた念仏や禅などを信じたり弘めるほどの悪はないと断じられたのです。

ですから、仏教を信ずるようできて自説に固執して好き勝手な教えを弘め、正法の法華經を誹謗する僧侶などを悪師と呼ばれたわけです。

なお、罪を憎んで人を憎まずという言葉がありますが、お祖師様は謗法を憎んで人を憎まずというあり方で、たとえ謗法の人であっても、眞實の慈悲によって相手を導かれ、その人が救われるようにという思いであられたことはいまでもありません。

## 語句

能化 = 教化する方、教導する側を能化といい、教えを受ける方を所化という。

大菩薩 = 菩薩とは菩提薩埵の略で、これは古代インドの人工的に作られた文語であるサンスクリット語のボーディサットバ(bodhisattva)を漢字で音写したもの。その意味は「上求菩提、下化衆生」……上は菩提を求め、下は衆生を化す、上に向かっては悟りを求めて修行し、下に向かっては人々を助け教化する人という意味。

阿羅漢 = サンスクリット語のアルハン、アルハット(arhan, arhat)の音写で応供とも訳される。応供とは供養を受ける資格があるという意味で、普通は小乗仏教の最高の聖者をさす。人天 = 人間界と天上界のこと。天上界とは美的、芸術的快樂にひたることができる世界、神々の世界。

四衆 = 仏の四衆といい、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四種の人々。男性の僧侶、僧尼、在家の男性信者、女性信者をさす。

八部 = 天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩羅迦の八種類の人非人つまり人ではない人、普通の人ではなく超自然的な存在者です。

これらは八番雜衆といって法華經が説かれたときに釈尊の御弟子の阿難尊者やその他の御弟子(声聞)、菩薩、阿闍世王などの人々とともに、その座に列して聴聞したことが説かれています。私たちの目には見えない存在なので冥衆ともいい、その解釈は昔からいろいろです。

門祖聖人もあらためて、さまざまな角度から解釈されて最後に、これらの八番雜衆は信

者の心の中の信じる心と謗る謗法の意を顕わすとも、あるいは善心、悪心、無記(善悪どちらでもない)の心を顕わすとも解釈できるとされています。\*3

これらの八部はインド古来の土着信仰とも関連あるようで、特に法華経で天人としてあげられている神々はほとんどヒンドゥー教で崇められています。

八部の説明をしますと

天とは天界の釈提桓因(インドラ神)などの神々

龍とは八大龍王で仏法守護の神、畜生界(動物)の代表です

夜叉とは法華経行者を守護する神

乾闥婆とは香りを食する音楽の神

阿修羅は闘争を好む鬼神で修羅とも省略されます

迦楼羅は鳥類の王

緊那羅は歌詠の神で人に似ていますが頭に角があるという神です

摩羅迦はおろちを象徴する鬼神

調機調養 調とはととのえる、機とは仏道を歩むものの宗教的能力を意味しますから、調機とは法華経を聴聞して修行できるように釈尊が人々の能力を調整されたということで、調養もととのえ、やしなうということで同じです。つまり、法華経を聴聞して皆、ご利益を頂けるように用意入念に四十二年間、準備のためにいろいろなお経を説かれ、皆の能力が養成されて、もう法華経を説いて聞かせても大丈夫という段階に至って、最後の八年間、法華経を説かれたといわれています。

以上、当節では釈尊ご在世の時代といま、お祖師様をご奉公されている末法の時代とを対比して、法難が起こってくるのは、むしろ当然であることを述べられたところです。

御教歌に

末法の法華修行は在世より

猶怨嫉の多しとぞ聞く

(一五八八 扇全十三 十四頁)

註

\*1 この数字は門祖日隆聖人がつけられた御文段に基づく分科による。

御文段を最初の大項目を大文として、大文を分けて大科とし、大科を細分して中科、次に小科、さらに大節、中節、小節、さらに目、項(大、中、小)というようにすればほとんど足りる。

これをこの解説では、数字だけを入れておく。たとえば 1 2 4 2 という表記は大文第一、大科第二、中科第四、小科第二と訓むことにする。

なお、ここでは本文を少しずつ区切って解説するが、御科文全部を順番にあげると煩瑣なので掲げた本文に直接がいう御科文のみを付けることとする。

なお、御科文の全部が昭和三十年、佛立教学院発行、野崎日丞上人編著の「如説修行抄(全)」

に掲載されている。しかし、かなり紙面を要するので今は、省略することとする。

\* 2 ただ、お祖師様の場合は、末法の人々は解脱を目指し悟ろうとしても、宗教的な素質、機根からいって無理であるとされた。そして自力による解脱、そして悟りの智慧に至る道の代わりに、誰でもできる信心口唱によって仏と同じ果報を頂けることを明らかにされた。これを以信代慧という。

\* 3 弘経抄 隆全一 四七六頁